

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 11 日現在

機関番号：25403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520473

研究課題名(和文)複数の言語における「味を表す表現」に関する研究

研究課題名(英文)Study on the expressions of taste in plural languages

研究代表者

武藤 彩加 (MUTO, Ayaka)

広島市立大学・国際学部・准教授

研究者番号：00412809

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：明らかになったのは次の2点である。(1) (味を表す表現における普遍性について) 5つの言語の母語話者による味を表す表現は、一見、混沌としていて多種多様であるが、おおむね日本語の「味ことは分類表」によって分類が可能である。従ってそこには、5言語に「共通する規則性」が認められる。(2) (相対性について) その一方で、語彙の分布と広がりには多様性が認められる。以上から、語彙の分布と偏りには、生理的動機づけ、認知的動機づけ、環境的動機づけという3つの動機づけがあることが示唆される。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the following two points.(1) On universality in the expressions of taste:The expressions of taste described by the native speakers of the five languages have variety and seem to be chaotic. However, we can classify them using the Japanese “classification table of the expressions of taste,” which is the framework of the analysis used in this study. Therefore, “the common regularity” would be accepted there in five languages.(2) On relativity in the expressions of taste:On the kind or the quantity of the expressions of taste, each language shows a different aspect. Thus, it is thought that a difference of culture is reflected in distribution of the expression of taste and the state of languages such as deflection. It is suggested from this result that the expressions of taste are supported by these motives: an environmental motive, a cognitive motive, and a physiological motive.

研究分野：認知言語学

キーワード：言語普遍性 相対性 生理的動機づけ 認知的動機づけ 環境的動機づけ 身体性 味覚

## 1. 研究開始当初の背景

「言語相対性仮説 (Sapir-Whorf hypothesis)」のいわゆる強い形の決定論では、言語が人間の認知や思考を決定すると主張されている。つまり同じものを見たり聞いたり味わったりしても、そのものに対する認知は使用する言語によって大きく制約されるとする。一方, Berlin & Kay (1969) では、様々な言語における一見多種多様な「色彩語彙」体系が神経生理学特性による普遍的な制約下にあることを明らかにした。それと同時に基本色名に対応する色範囲の違いは、それぞれの文化的な背景を反映しているとする。

以上をまとめると、「言語相対性仮説」的な言語観では、ある種の味表現が存在するからこそ、その味を感じるということになる(即ち「言葉 認知」という方向性)が、一方で Berlin & Kay (1969)らの一連の研究においては、言語のあり方は認知の主体である人間が外的世界をどのように認識しているかによると考える(「認知 言葉」)。

## 2. 研究の目的

この研究では、複数の言語における「味を表す表現(以下、「味表現」)」を収集し言語間で比較することにより、そこに現れる普遍性(ヒトという生物が持つ共通性)と多様性(文化による相違)を明らかにする。具体的には、5つの言語を対象とし、食品のテレビコマーシャルで使用されている表現を収集し使用実態を記述する。さらに、当該言語母語話者に対して調査を行い、慣習化された表現の使用状況の意識についても明らかにした後、瀬戸(2003)の「味ことば分類表」を分析の枠組みとすることで、5つの言語における味表現の全体像を捉える。そして、言語相対性仮説をめぐる諸問題について認知主義的立場から解決の糸口を探る。

## 3. 研究の方法

### 1) 平成 24 年度：韓国語の調査

韓国のテレビコマーシャルにおける味表現の収集と分析。

- ・韓国でテレビコマーシャルを録画し、食品の CM のみを抜き出す。録画時間は 12 時間。
- ・すべての内容を文字化しコーパスを作成する。
- ・CM の対象となっている商品について表を作成する。
- ・味表現すべてを選び出し、異なり語数と延べ語数をまとめる。

韓国語母語話者 60 名(於、啓明大学)を対象とする「味表現」使用状況の意識に関するアンケート調査の実施。

- ・武藤(2011)で作成した調査票を利用する。
- ・日本語の味表現 221 種に対応した形で作成した「150 の食品リスト」をもとに、インフォーマント一名につき 50 食品について、その食品の味を表現するのにどのような味表現が可能であるのかを自由に書いてもらう。

### 2) 調査結果の分析

テレビコマーシャルに関する調査結果から「韓国の食品 CM」について次の項目をまとめ、その特徴を分析する。

- ・対象商品一覧、使用された味表現の使用回数、主な使

## 用語

韓国語母語話者に対する味表現に関するアンケートの調査結果から収集した用例を瀬戸(2003)の分類表により整理・分類し、韓国語の味表現の特徴(分布や偏りなど)を明らかにする。

### 2) 平成 25 年度：英語の調査

1)の韓国語と同様の手順で英語についても調査を行った(調査地・ハワイ大学、ヒロ校)。

3)平成 26 年度：過去に行ったスウェーデン語も含め、韓国語と英語の調査で得たデータのとりまとめと分析、発表

### 4) 平成 27 年度：中国語の調査

韓国語、英語と同様の手順で英語についても調査を行った(調査地・上海大学、西南大学、国際関係学院)。

## 4. 研究成果

本研究では、韓国語、英語、中国語、スウェーデン語、そして日本語の 5 つの言語における味を表す表現の全容を体系的に示したうえで、そこに認められる普遍性と相対性について考察した。明らかになった点は次の 2 点である。

(1)(普遍性について):5つの言語の母語話者による味を表す表現は、一見、混沌としていて多種多様であるが、おおむね味ことば分類表によって分類が可能である。従ってそこには、5言語に「共通する規則性」が認められる。

(2)(相対性について):その一方で、語彙の分布と広がりには多様性が認められる。例えば、中国語と韓国語においては、硬軟、芳香、粘性、乾湿の表現が豊富にみられるなど、似通った語彙の分布がみられ、また辛味の表現が日本語と比べて豊富である等の特徴も共通して認められる。中でも日本語は、触覚の表現が発達しており、テクスチャー(食感)表現も他言語と比べ圧倒的に多く、ビールのおいしさを表す際も触覚(喉越し)が多く使用される。その反面、スウェーデン語と英語の語彙の分布のさまは、アジアの諸言語とは全く異なる様態をみせる。以上から、語彙の分布と偏りには、環境などの要素や食生活、文化的背景等の差異が直接的に反映されていると考えられる。すなわち、共通する普

遍的要素(生理的動機づけ)があるのと同時に,各々の言語が有する相対性(環境的動機づけ,認知的動機づけ)も存在する。

また,日本語以外の言語において味を表す際にも,共感覚表現が多く使用されていることがわかったが,言語普遍性の現象の一つとされる「一方向性仮説」に反する例も多く認められた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者,研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

- (1) 副島健作,武藤彩加(2012),日本語学習者の「テクスチャー表現」の使用について - 沖縄の留学生を対象に(共著),『ヨーロッパ日本語教育』第16号,ヨーロッパ日本語教師会(AJE),pp.166-170,2012年6月.
- (2) 副島健作,武藤彩加(2013),日本語学習者による「テクスチャー(食感)表現」の使用(共著),『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第8号,東北大学高等教育開発推進センター,2013年3月,pp.27-38.
- (3) 武藤彩加(2013),韓国語における「味を表す表現」の類型化 - 日本語と韓国語の比較を通して(単著),『韓国日本語学会論文集』第37号,韓国日本語学会,2013年9月,pp.17-35.
- (4) 武藤彩加(2013),韓国語における「味を表す表現」の収集と分類(単著),『韓国日本語学会第28回学術発表会予稿集』,韓国日本語学会,pp.84-90,2013年3月.
- (5) 武藤彩加(2014),英語母語話者によるおいしさの表現 - 韓国語と日本語との比較を通して -, The 10th International Symposium for Japanese Language Education and Japanese Studies 予稿集,香港大学專業進修学院,2014年11月,p.77.
- (6) 武藤彩加(2015)「日本語母語話者による「味を表す表現」- スウェーデン語と英語,および韓国語との比較を通して - 」, Journal CAJLE16 (オンライン).
- (7) 武藤彩加(印刷中)「中国語母語話者による「味を表す表現」 日本語との比較から」, 2016(平成28年度) 第2回日本語教育学会研究集会(愛知・愛知県立大学)発表予稿集.
- (8) 武藤彩加(投稿中)「英語母語話者によるおいしさの表現 - 日本語との比較を通して - 」,広島国際研究 22.

[学会発表](計10件)

- (1) 武藤彩加・副島健作(2012),テクスチャー(食感)表現使用にみられる男女差について(共同),言語文化学会第26回大会(2012年12月8日),於阪南大学.
- (2) 武藤彩加(2013),韓国語における「味を表す表現」の収集と分類(単独),韓国日本語学会第28回学術発表会(2013年3月23日),於韓国・東国大学校.
- (3) 副島健作・武藤彩加(2013),韓国語母語話者は「食感」をどう表現するか-日本語母語話者との比較か

ら-(共同), 沖縄県日本語教育研究会 2011 年度研究発表会(2013年3月1日),於琉球大学.

- (4) 武藤彩加・副島健作(2013),「食感」表現使用の言語差 - 日本語母語話者と韓国語母語話者との比較 - (共同), 韓国日本近代学会第28回国際学術大会(2013年,10月26日),於沖縄国際大学.
- (5) 副島健作・武藤彩加(2014),日本語学習者の日本語力に影響を及ぼす外的学習者要因 - 中国とロシアとの比較 - (共同), Sydney-ICJLE2014<日本語教育国際研究大会(2014年7月11日),於オーストラリア・シドニー工科大学.
- (6) 武藤彩加・副島健作(2014),日本語の「共感覚的比喩」の一方向性仮説に関する分析 - 日本語の五感を表す「動詞」と「副詞」,および「形容詞」の意味転用の方向性 (共同), The14th International Conference of EAJS(2014年8月29日),於スロベニア・リュブリャナ大学.
- (7) 武藤彩加(2014),「味」のレトリック - 日韓のTVコマーシャルで使用されている「おいしさ」の表現 - (単独), 社会言語科学会第34回大会(2014年9月13日),立命館アジア太平洋大学.
- (8) 武藤彩加(2014),英語母語話者によるおいしさの表現 - 韓国語と日本語との比較を通して - (単独), The 10<sup>th</sup> International Symposium for Japanese Language Education and Japanese Studies (第10回国際日本語教育・日本研究シンポジウム)(2014年11月15日),香港大学.
- (9) 武藤彩加(予定)「中国語母語話者による「味を表す表現」 日本語との比較から」, 2016(平成28年度) 第2回日本語教育学会研究集会(愛知・愛知県立大学).
- (10) 武藤彩加(予定)「味を表す表現」使用にみられる男女差 - 中国語母語話者を対象とした調査から - 」, Bali ICJLE 2016(Bali Nusa Dua Convention Center (BNDCC)).

〔図書〕(計2件)

- (1) 武藤彩加(2016)「味のレトリック」, 『共感覚から見えるもの』, 2016年4月, 勉誠出版.
- (2) 武藤彩加(予定)「味ことばと共感覚」, 『シズルワード「おいしい」言葉の使い方』, 2016年6月, BMFT出版部.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

武藤 彩加 (MUTO AYAKA)

広島市立大学・国際学部・准教授

研究者番号: 00412809

### (2) 研究分担者

副島 健作 (SOWJIMA KENSAKU)

研究者番号: 60347135

東北大学・高等教育開発推進センター・准教授